



友情をかけた嘘



進路

春日信彦

舞い込んできたチャンス

1 2月2日(日)夕食後、リビングではゆう子の母親、陽子は目を輝かせて一人で舞い上がっていた。その日の午前中に、篠田教頭が東京の新体操の名門、東京女子体育大学付属W高校の新体操特待生の話を持ってきたからだ。ゆう子は5歳の時から六本松にあるR新体操クラブに通っていた。彼女は小柄ではあったが、運動神経の良さと明るさが持ち味でコーチからも有望視されていた。

篠田教頭は三年生すべての学力チェックのほかに、家庭の経済状況、生徒の特性についての情報を担任の教師から入手していた。これはエリート主義教育には欠かせない手続きの一つであった。一人でも多くの生徒を名門高校に入学させるために、教頭はあらゆる手を使って名門校とのパイプを構築していた。W高校の新体操部監督、新城マリナは高校の同期であった。篠田教頭はゆう子の新体操の情報を知ると、即座に親友マリナに特待生の件を打診していた。

マリナ監督は篠田教頭からの情報を元に密かにR新体操クラブを視察した。ボール演技におけるボールキャッチの正確さと美しさを見たマリナ監督は、ゆう子の関節の柔らかさと空間イメージ能力に驚嘆し、篠田教頭にOKの返事を送っていた。篠田教頭はOKの返事を受け取ると、早速、ゆう子の母親と連絡を取り、特待生の吉報を知らせるため自宅を訪問した。知らせを受けた母親、陽子は気絶せんばかりの喜びで、その日の夕食後、ゆう子にW高校への進学を勧めていた。

泡を吹かんばかりの口調の説得を母親は繰り返していたが、ゆう子は心の底では嬉しく思っていたが、即座に進学の返事をしなかった。母親は何が気に食わなくて、躊躇しているのかまったく分からなかった。ゆう子には誰にも話していない大きな理由があった。それは菊池勇樹とのやり取りにあった。「ゆう子、おまえ、どこの高校に行くんか?」「糸高!」ゆう子は何気なく答えた。「お～、俺もだ、糸高でもよろしくな」菊池も笑顔で応えた。この一言がゆう子の頭から離れなかった。

この会話は10月のことであったが、菊池の返事は重大事件であることをゆう子は感じ取っていた。菊池はリトルリーグの伊都ヤンキーズのときから左腕のエースとして活躍しており、九州では大人をうならせるほどのナチュラルカットを投げていた。菊池が中学に入ると、九州の名門高校のスカウトが視察にやってきた。将来プロ選手になってほしいと願う父親、太は大分のY高校の特待生の話に飛びついていた。

当然、菊池は大分のY高校に進学するものとゆう子は思っていた。ところが、甲子園とは無縁の田舎の糸島高校に進学すると言ったのだ。一瞬、冗談と思ったが、マジで応えていたようにも思えて、あの時の一言が心に重くのしかかっていた。ゆう子は天にも昇るような特待生の話が12月に舞い込んでくるとは夢にも思っていなかった。いまさら、W高校に進学するとは菊池に言えなかった。悩んだ挙句、生徒会長の横山に相談した。横山はW高校に進学すべきと助言した。

菊池の決断

横山は菊池と大島の気持ちを察知していた。横山は二人とは小学校のときからの親友で、二人がなぜ進路に悩んでいるか痛いほど感じ取っていた。横山は二人の将来のことを考えて、最善の策を考えていた。菊池にゆう子の進学のことを話す決心をした横山は、佐藤を交えて将来の話をすることにした。横山は佐藤に菊池をマックに連れてくるように頼んだ。12月9日(日)横山は窓際の席を陣取ると、二人がやってくるまで話の段取りを何度も練った。

2時を回ったころ、佐藤が先頭にドアを押し開け入ってくると、横山は手を振って笑顔で合図した。いつものように、二人はチーズバーガーとコーラをトレイに乗せると横山のテーブルにやってきた。「ゆう子は？」佐藤が訊ねた。「突然、お客さんが東京からやって来るんだって、今日は三人と言うことで」横山はとりあえず口からでまかせを言った。横山はどのように口火を切っているか悩んだが、野となれ山となれとエリートクラスの話 시작했다。

「受験って、ほんと、イヤね。エリートクラスは毎日テストよ。宿題は多いし、補講は毎日だし、合格したら、思いっきり遊んでやる」横山はぼやきを入れて二人の口を軽くすることにした。「佐藤君はどこ的高校を受験するの？」まず佐藤に話しをさせて、菊池の本心を聞き出す作戦に出た。「俺か、糸高とH高校に決めたよ。おそらく、糸高に着地すると思うけど」話し終わると大きく口を開けバーガーにかぶりついた。

元気の無い菊池はストローでコーラを飲んでいて、「菊池君はどこ？」横山はこれからが正念場と気合を入れた。「俺か、佐藤と同じ」バーガーをかじるように食べ始めた。「え！糸高ってこと、Y高校じゃなかったの？」横山は目をむき、身を乗り出して、驚きの声を発して訊ねた。「そうだけど、俺の頭じゃ、無理ってか」菊池はとぼけた返事をした。「そうじゃなくて、Y高校に行かないの、スカウトされたんじゃないの？」横山は鬼になって菊池の心と戦うことにした。

佐藤もあきれた顔で菊池を見つめた。佐藤は、以前菊池からY高校を断ったと聞いて驚いていた。「もったいないんじゃないか、菊池、お前だったら、Y高校でもエース取れるんじゃないか。お前にしては弱気だな～」佐藤には菊池の心がまったく分からなかった。「菊池君、佐藤君の言う通りよ、菊池君ならきっとエースで甲子園に行けると思うわ。Y高校の監督が気に食わないの？」横山は菊池の心をほんの少しでも動かしたかった。

「いや、監督さんはすごく立派な方だよ。親父もほめていたし。でも、俺は、名門高校には向かないと思うんだ。田舎の弱小高校で甲子園を目指すほうが、俺には向いていると思ったんだ。親父にもそのことを言って、納得してもらったよ」菊池は口が裂けても本心を言いたくなかった。「そうなの、菊池君には菊池君の考えがあったのね、そう、そう！ゆう子ね、東京のW高校に決まりそうって言ってたわ。教頭の口利きがあったみたいね。鬼教頭もいいところあるじゃない」横山はゆう子に口止めされていることを話してしまった。

「え！嘘だろ、ゆう子は糸高って言ってたぞ」菊池はあまりのショックにコーラのカップを握りつぶしていた。あふれ出た黒いコーラはトレイに広がった。「菊池君、袖が濡れてる」横山はハンカチを取り出すと菊池に手渡した。「知らないのは当然よ、12月に入って、特待生の話が決まったみたいよ。菊池君もW高校に行きたくなかったの」ついに横山は菊池のハートに矢を放った。

血の気が引いた菊池は「バカ言え」と叫んだが、あまりのショックに死にたくなかった。「菊池、東京といっても飛行機を使えば3時間で会えるじゃないか、そんなにがっかりするな」佐藤はなんと言っていていいか分からず思いつきの励ましをした。菊池の頭の中は真っ白になっていた。「ゆう子は才能あるしな。良かったよな」菊池はこれ以上、この場にいたくなかった。スッと立ち上がると無言で立ち去った。両手をポケットに突っ込んだ菊池は、ぼんやりと亡霊のように裏道を歩いていた。

東京と聞いたとき、ゆう子とは一生会えないような気がした。菊池はゆう子の応援が嬉しくてマウンドに立っていた。大きな試合ではいつもスタンドのどこかで応援してくれていた。東京に行ってしまうと、ゆう子の応援する姿が消えてしまう。このことを考えると野球の意欲まで消えうせてしまった。ゆう子の喜ぶ笑顔を楽しみに、必死になって投げた菊池にとっては、ゆう子のいない甲子園なんてどうでもいいように思えてきた。

部屋に閉じこもった菊池は夕食も取らず、寝込んでしまった。このまま、死ぬまで眼を醒ましたくなかった。眼を閉じると、ゆう子との別れの想いが次から次へと湧き出てきた。東京の高校に行ってしまうと、東京の大学に進学し、東京で就職することになる。きっと、二度と会えない。ゆう子のことだからすぐに彼氏ができるに違いない。東京のイケメンに勝てっこない。田舎者の俺なんか、すぐに忘れられる。本当に東京に行っちゃうのかよ～。

ドタン、ドタンと階段の鳴り響く音が菊池の耳元に近づいてきた。「兄ちゃん、メシ」弟の浩二が叫ぶとすぐに階下に降りて行った。勇樹は何も食べたくはなかったが、Y高校の進学の話す為に降りて行った。「寝とったんか？はよ、飯食わんか」父親の太は怒鳴りつけた。「寝とらん、考えごとば、しよつたと、うぜ～な～」勇樹は椅子に腰かけるとお茶をすすっている父親に話しかけた。

「Y高校のことばってん、俺、やっていけるやろか？」Y高校を一度は断ったが、ゆう子との別れを考えると、勇樹は糸高に行く気がしなくなっていた。頑として断っていた勇樹がY高校の話始めたとき、太の目は輝いた。「お！行く気になったとか？監督に断りの返事はしとらん。本当に行く気か！」太は本心を確認したかった。「名門でエースになれるか、自信ないけど、行こうと思う」勇樹はゆう子を忘れるには一番いい方法と考えた。

「よし、分かった。すぐに、監督にお願いするけん、甲子園目指して頑張れ」涙が出そうなほど太は嬉しかった。太もかつては甲子園を目指す野球少年だった。甲子園の夢はかなわなかったが、勇樹には甲子園のマウンドに立ってほしかった。そして、一軍のプロ野球選手になってほしかった。だが、太の心に何か冷たい風が吹いた。なぜ、今頃、Y高校に行く気になったのか？ふと、そのことが頭をかすめた。

どこか納得がいかない太は、親友の糸島高校野球部監督、中村に相談の電話を入れた。翌日、いつもの居酒屋赤ひげでいっぱい飲む約束をした。中村とは高校時代バッテリーを組んでいた。捕手の中村は頭がよく社会科の教員資格を取り、野球部の監督として活躍していた。太は実業団でノンプロとして活躍したが、プロ野球選手にはなれなかった。今は工作機械を製造するM製作所で班長として部下の指導に当たっている。

先に着いた太は、ボトルキープしている“焼酎いいちこ”のお湯わりをカウンターで飲み始めた。8時を回ったころ、無愛想な中村が暖簾をくぐってやってきた。太の左隣の椅子に腰掛けると6-4のお湯わりを作り中村に手渡した。「今日は俺のおごりだ。好きなだけ飲め」酔った太の愚痴を中村に聞いてほしかった。「勇樹のことだな、糸高じゃ不服ということか、俺を信用しろ、必ず大物にしてみせる。何も、甲子園に出るだけが野球じゃない、しっかり、基礎を作って、大学で活躍できれば、プロも夢じゃない。そう、がっかりするな」

中村は、一ヶ月前、Y高校を断った勇樹の話を知り、太が絶望しているのを感じ取っていた。今日もまた、酔って荒れるんじゃないかと懸念して、太の機嫌をとることにした。「実はな、勇樹のやつ、Y高校に行くと言い出した。どうしたもんか」太は焼酎をすすると串先の鳥キモをひとつ啜えた。「え！マジか、おい、良かったじゃないか」中村は笑顔で太の左肩を叩いた。

「まあな、本人が決めたことだから、後悔はしないだろう」太は勇樹の決断を誇らしげに思ったが、本当に本心なのか疑問に思っていた。「元気がないじゃないか、どうしたんだ、Y高校だったら、甲子園は見たも、同然じゃないか。大分ではダントツだからな。まあ、スカウトされたトップ選手相手にエースを勝ち取ることになるから、安心はできないけどよ。俺は、勇樹の才能を認めている。きっと、甲子園のマウンドに立っているさ」中村は左腕の勇樹を小さいときから見ており、体の柔らかさと全身のひねりを利かせたピッチングを高く評価していた。

「あのな、勇樹は本心で行く気になったのか、ちょっと気になったんだ。最初、あれほど拒んでいたのに、今になって急に行く気になったというのが気になったんだよ。もし、親を喜ばすために行く気になったのならば、俺は嬉しくない。本当に、名門校が肌に合わないと思うんならば、行かなくていい。田舎の糸高でのびのび基礎作りをやればいい。これは、遠回りのようだが、プロになることを考えれば正当な考えだ。俺は、無理にY高校を進めたくない、お前ならば分かるだろう」太は本音を吐いた。

「う～ん、確かに一理あるよな。でも、甲子園を目指すことは自分の限界に挑戦することでもある。だから、Y高校に行くということは、プロへの試金石とも言える。へたをすれば、肩を壊して選手生命を絶たれることだってある。プロになれるかどうかは、運命だな。悲観するな、勇樹を信じようじゃないか。俺は、勇樹は必ずプロになれると信じている」中村はプロになることの難しさを嫌というほど味わっていた。太も結果的にはプロになれなかった。

中村監督は勇樹のY高校の進学を心から喜んでいて、高校球児で甲子園の夢を抱かないものはいない。二人の夢はかなわなかったが、勇樹には甲子園のマウンドを踏んでほしかった。「そうか、俺たちの夢を勇樹に託すか。勇樹は俺とは違う、お前の言葉を信じるよ。今夜は飲もう。あのころ、よく二人で馬鹿をやったな。なんだか、眼から、汗が出てきたばい。俺も年だな～」無心で練習していたころの二人の姿が太の眼に浮かんできた。

ゆう子の旅立ち

横山はとうとう口止めされていたゆう子のW高校進学の話が菊池にしてしまった。確かに、自責の念はあったが、ゆう子の性格を考えればやむをえないと思った。ゆう子は少し気が弱いところがあって、誰かに背中を押してもらわないと第一歩を踏み出せないところがある。そのことを小さいときからの親友である横山はよく知っていた。ゆう子はきっと今でもW高校の進学のことと悩んでいるに違いないと横山は思った。

ゆう子への最後の一押しを決行するため横山は断腸の思いで嘘をつく決意をした。12月16日(日)ゆう子の自宅に遊びに行った。「こんにちは」横山は母親の陽子に挨拶をした。「いらっしゃい、久しぶりじゃない、元気そうね」陽子は横山をリビングに案内した。「ゆう子、横山さんよ、降りてらっしゃい」陽子は大きな声でゆう子呼んだ。「ハイ、すぐ行く！」ゆう子は階段をかけて降りた。

「横山さん、エリートクラスってお聞きしたわ。さすがね、高校はどこを受験なさるの？ S高校とK高校を志望しています。自信はあまりないんですけど」横山は謙遜して言った。「まあ、すごいじゃない、将来の夢は？」陽子はいつもの詮索好きが始まった。「できれば、司法試験に合格して、裁判官になりたいと思っています。本当に、夢ですよ」横山は口が軽い陽子に口止めするような言い方をした。

「そんなことはないわよ、秀才だから、きつとなれるわよ、それに比べて、ゆう子は夢がないんだから、横山さんのつめの垢でもせんじて飲ませようかしら、ね～、ゆう子」陽子の皮肉が始まった。「お母さん、ゆう子は立派な夢を持っているじゃないですか、新体操で、オリンピックに出る夢を」横山は思い切った嘘を言った。「え！ほんと！ゆう子、ってことは、決心したのね、特待の話」陽子は喜色満面の笑みを浮かべ大きな声で確認した。

「え！まだよ、自信ないの、こんな田舎者が、東京でやれるかどうか？全国からエリート選手が集まってくるとよ、自分なんて、すぐに落ちこぼれるに決まってる。新城監督の思い違いよ、やっぱし無理よ」ゆう子は菊池のことを思うと本音をいえなかった。「どうしてこんなに弱気なんだろうね、いったい誰に似たのかしら、お父さんに似たのね。ゆう子、こんなチャンスは一生に一度よ、二度とこんなチャンスはめぐってこないのよ、いいの、断って？」陽子は怒りと共に悲しみがこみ上げていた。

「ゆう子、スポーツに田舎者とか、そんなことは関係ないと思うよ、いいじゃない、田舎者で、実力で勝ちあがればいいじゃない、そお、そお、菊池君ね、甲子園に出たいから、大分のY高校に行くって、言ってたよ。やっぱ、男ね！見直したわ」ゆう子に嘘のハードパンチを食らわした。「マジ！菊池君がそう言ったの？いつ聞いたの？」ゆう子には信じられなかった。

「この前の日曜日」横山は何気なく答えた。「嘘よ、菊池は糸高のはずよ、どこで聞いたのよ」ゆう子の心に横山に対する強烈な嫉妬が起きた。「マックよ、佐藤が、今から入試までどんな勉強をしたらいいか教えてくれって言うから、マックで待ち合わせていたら、菊池も一緒にやってきたのよ。そのとき、進学の話になって、菊池がY高校に行くって言ったのよ」横山はいまさら後には引けないと思いき嘘を突き通した。

ゆう子の顔が急に青くなった。何か、菊池が自分から離れていくような、氷のような淋しさが、全身に広がった。「そう、菊池がそう言ったの、当然か、野球馬鹿だから、甲子園に行きたいんだらうね。嘘つき！」ゆう子は涙を抑えるために眼を吊り上げた。「ゆう子、菊池は、きっと、甲子園に出ると思う。W高校の監督が太鼓判を押したらしいよ。ゆう子も監督に見込まれたんだらう、女の意地を見せなよ」横山はもう一押しした。

「横山さんの言う通りよ、新城監督はオリンピック強化選手の監督もなされてある日本屈指の監督よ。ゆう子、監督を信じて、チャレンジしてはどう！」陽子はゆう子の顔をそっと覗き込んだ。ゆう子はしばらく黙っていた。何か魂が抜けてしまい、心が空洞化してしまったように感じた。今までいったい何を悩んでいたのか分からなくなっていた。なぜ、新体操をやっているのだろうか、なぜ、やめようとししないのか、心は何も答えようとしなかった。

「ゆう子、どうしたの？顔色が悪いわよ」陽子はゆう子の心を傷つけてしまったのではないかと少し反省していた。「そうよね、野球馬鹿は甲子園を目指すわよね。ゆう子は、ただのバカってわけか。そいじゃ、今夜、決めるけん！」ゆう子は新体操を続けるか、やめるか、決めることにした。「横山、二階において」ゆう子は立ち上がると階段に向かった。横山もすぐに立ち上がるとゆう子の後を追った。

その夜の夕食後、母親と父親はゆう子のを話を待っていた。陽子はジョナゴールドの皮をむきながら、ゆう子の顔を時々覗いていた。父親、宗一郎はお茶をすすっては囲碁の本“秀行の創造”を読んでいた。妹の詩織はデザートのエclairを手持ち無沙汰に待っていた。陽子が四分の一にカットしたエclairを小皿に載せ、それをそれぞれのトレイに載せたとき、ゆう子は話を切り出した。

ゆう子は大きく深呼吸するとゆっくりと話し出した。「東京に行こうと思う。お父さん、お母さん、いいですか？」ゆう子は何日も悩んだ挙句の結論を話した。「そお、やっと決心がついたのね、お母さんは賛成よ、お父さんは？」陽子は笑顔で宗一郎に問いかけた。宗一郎は少し驚いた顔を見せたが、落ちついた口調で話しはじめた。「ゆう子が決めたことだ、お父さんも賛成だ。でも、決して、無理はするな」

ゆう子はほんの少し笑顔を見せて話を続けた。「マジ、自信はまったくないの。全国から選ばれたトップクラスのエリート選手相手に戦うなんて、まったく自信ないけど、二度とないチャンスと思うから、やってみる」ゆう子は真剣な顔で決意表明をした。詩織はあっけにとられた顔で声をかけた。「お姉ちゃん、東京に行っちゃうの、いつまで？」詩織は淋しそうな表情でゆう子を見つめた。

ゆう子は現実的な質問に胸がキュッと締め付けられた。「あ！それは、いつまでだろう、挫折したらすぐに戻ってくるかも」東京に行くということは一人になる。また、家族や友達と別れることになる。そのことを思うと急に淋しくなった。陽子は優しい眼差しでゆう子に言った。「やるからには、オリンピックに出るまで、とことんやりなさい。一人じゃないの、家族みんなで頑張るのよ。いつでも、応援に行くから、元気を出しなさい」ゆう子の淋しさを察知した陽子は優しく励ました。

詩織は笑顔を作ると明るい声を上げた。「やった～、詩織も東京に行けるんだ～」宗一郎も励ましの言葉をかけた。「ゆう子、全力を尽くせばいいんだ。挫折しても、決して恥ずかしいことじゃない。チャレンジしたことは一生の宝物になる。心配せずにやりなさい、みんなで、応援に行くから、元気を出せ、ゆう子」ゆう子が離れることはほんの少し淋しかったが、宗一郎は思いっきり笑顔を作った。

翌年、4月1日（月）筑前前原駅に横山、八神、佐藤、松島たちはゆう子を見送るために集まった。菊池は一足先に大分に出立していた。「菊池のやつ、さっさと行きやがって、冷たいやつだぜ」松島は菊池の気持ちがまったく分かっていなかった。「まあ、いいじゃないか。菊池の分まで盛大に見送ろうぜ」佐藤は菊池がなぜ先に出立したのか分かっていて、「よし、バンザイ三唱で見送るぞ、いいな、みんな」佐藤はみんなに気合を入れた。

「きゃ～、はずかし～、みんな、ありがとう。休みの日には糸島に帰ってくるけん、そのときは、遊んでくれよな」大島は一人一人、しっかりと握手した。「みんな、用意はいいか、オリンピック目指して、頑張れ、ゆう子！バンザ～イ、バンザ～イ、バンザ～イ」佐藤の音頭で、四人は両腕を振り上げ、バンザイ三唱のエールを送った。「みんなさん、ありがとう、ゆう子、皆さんの気持ちをわすれず、全力を尽くすのよ」陽子は四人に頭を下げお礼を言った。

ゆう子は午前、10時10分、福岡空港から羽田に飛んだ。スッと機体が浮いたとき、ゆう子の心は淋しさでいっぱいになった。一人になることの決意はしていたものの、淋しさだけは抑え切れなかった。窓から、福岡市街をぼんやり眺め、「横山、八神、佐藤、松島、さようなら」と心でつぶやいた。シートベルトを外すと、勇気を出して、菊池が出立する前日にゆう子に送った携帯のメールを開いた。ゆう子は何度も開けるのを躊躇していた。

*よう、俺は一足先に大分に行くぜ、ゆう子を見送るなんて、できっこないし。小学校から応援してくれて、ありがとうよ、うまくいけないけど、ゆう子が応援に来てくれると、なぜか、気合が入るんだな。カッコいいところ、見せたかったのかもな。これからは、ゆう子がスタンドにいないと思うと、やっぱり、淋しいけど、ゆう子の笑顔は頭に叩き込んでるけん、一人でも、頑張るばい。

ゆう子が東京に行くとき聞いたときは、へこんだけど、ゆう子は、やっぱり、さすがと思った。根性、あると思った。俺ときたら、しょぼい、情けなかった。ゆう子にカッコいいところ見せようと投げた俺に、けりを入れたみたいで、眼が覚めた。くよくよ、悩んでいたけど、甲子園のマウンドに立って、もっと、カッコいいところを見せちやる、と決心した。

恥ずかしくて、ゆう子の前では絶対言えんけん、メールで言うばい、ゆう子のこと大好きやったばい(^0^) そいじゃな*

ゆう子はこのメールで始めて気づいた。横山が嘘をついていたことを。今まで、ゆう子との約束を破ったこともなく、ゆう子に嘘をついたこともなかった横山が、約束を破り、嘘をついた。小学校のころから、正義を貫き通す裁判官になると胸を張って豪語していた横山が、自分を裏切り、嘘をついた。

もし、横山の嘘がなかったら、東京に羽ばたくことはなかったに違いない、とゆう子は思った。遠くに消えていく糸島を見つめるゆう子の瞳からは、感謝の涙があふれ出て、止まらなかった。

友情をかけた嘘

<http://p.booklog.jp/book/62788>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62788>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62788>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ